世界遺産学研究 No. 3 (2016)
ISSN 2189-4728

観光者の旅行記にみる世界遺産の構成資産に対する認識
― 世界複合遺産中国泰山を事例として ―

Study on Tourists'Perception of World Heritage Properties based on Online Travel Reviews：
A Case Study of Mount Taishan in China

李 崢暉
LI Zhenghui

１．序論
（１）背景

世界遺産条約の第 27 条は、「締約国の国民が自国の文化遺産及び自然遺産を評価し及び尊重することを強化すべき」と明示している[1)]。一方、観光ブームにより、多くの世界遺産地に観光者が殺到し、世界遺産の保護保全を脅かしている例もある。ユネスコ前事務局長松浦晃一郎(2008)は、世界遺産の顕著な普遍的価値を守っていく際に、観光者にも世界遺産の価値を次世代に伝えるという義務を認識し、世界遺産をじっくり鑑賞する姿勢が求められていると述べた[2)]。

中国における世界遺産は 2016 年に 50 件に達し、多くの観光者が世界遺産を訪れている。中国の山東省にある泰山は 1987 年に第一期の世界複合遺産に登録され、年間 500 万以上の観光者が泰山を訪問する。泰山は自然遺産１つ、文化遺産 6 つの登録基準に満たし、多様な価値を持ち、その価値を表現している構成資産も泰山の広い範囲内で点々と分布している。しかし、泰山の観光利用において、観光者の一部の区域への極端的な集中と短い滞在時間という問題が指摘された(尹, 2009)[3)]。これにより、観光者が泰山の一部のみを鑑賞しており、世界遺産の多様な価値を表現している構成資産に対する認識が偏っている可能性がある（王, 2013)[4)]。

泰山における世界遺産の教育普及及び持続的な観光事業を実現するためには、観光者に泰山の構成資産を偏りなく鑑賞させ、認識させることが重要であると考えられる。そのため、構成資産に関する情報提供の状況を把握し、観光者の認識の度合を確認することが必要である。

（２）目的

本研究は泰山を対象地とし、世界遺産の構成資産及びその観光整備と情報提供の現状を把握したうえ、観光者が投稿した旅行記にみる泰山の構成資産に対する認識の偏りを明らかにすることを目的とする。さらに、観光整備・情報提供と観光者の認識の偏りとの関係を考察し、世界遺産の構成資産を偏りなく認識させるための観光開発のあり方を検討する。

（３）論文構成と研究方法

1 章で研究の背景、目的、対象地の概要を示し、泰山の観光整備の現状を整理する。

2 章では、泰山の登録推薦書と世界遺産組織の評価書をもとに、泰山の構成資産の位置と種類を把握し、構成資産の評価点数を計算し、代表的な構成資産を抽出する。

3 章では現地調査を通して泰山の構成資産の現地での情報提供の現状を把握する。各構成資産の情報提供の状況を点数化する。

4 章では、中国最大の旅行記ウェブサイト「Mafengwo.cn」を選定し、観光者が投稿した旅行記における各構成資産の出現頻度をもとに、観光者の構成資産に対する認識を分析する。旅行記による分析では、アンケート調査のような質問者が用意した回答群に答える受け身の認識ではなく，観光者の主体的な認識の度合いを把握することができる(伊藤, 2013)[5)]。

5 章では、各章の結果を踏まえ、観光者の認識の偏りと構成資産の観光整備及び情報提供との関係を総合に考察する。

6 章では結論と展望を述べる。

（４）研究対象地

泰山は中国の山東省泰安市の北（泰山地区の広域の一部が済南市）に位置し、古代皇帝の封禅[注1]の儀式が行われる山であり、中国の十大名山の中の最も尊い山とされている[6)]（図 1)。泰山は壮麗な山岳景観と豊富な歴史文化旧跡に恵まれ、自然の美と文化の深みが融合している山である。1982 年に国家重点風景名勝区、1987 年に世界複合遺産に登録し、多様な価値を持っている。

世界遺産学研究 No. 3 (2016)
ISSN 2189-4728

世界遺産「泰山」の総面積が 250km²で、主峰は玉皇頂(1532.7m)である。現在観光開発が行われている区域は泰山の主峰を中心としている森林区域、泰山南麓にある泰安市の市街地、泰山の北西にある霊岩寺である。泰安市までの交通手段は高速道路と鉄道があり、世界遺産範囲内には、図 2 のように、石の登山道、2 つの遊覧バス車道と 3 つのロープウェイが整備された。山頂までの登山ルートは 4 つあり、それぞれの起点が紅門(南)・天外村(西)・天燭峰入口(北東)・桃花峪入口(北西)で、旅行案内所が 5 箇所に設置されている(図 2)。南に位置する鉄道駅に近い区域を中心に観光整備が進んでいる。

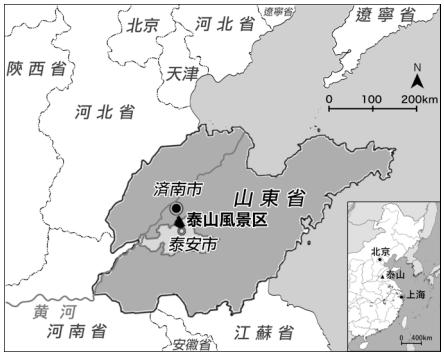

図 1 泰安市と泰山の位置

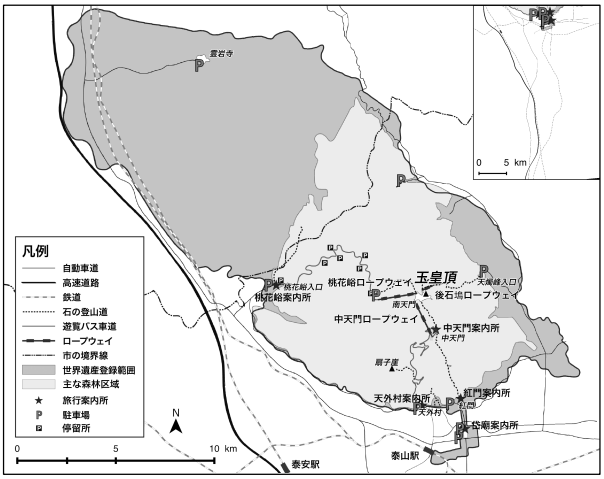

図２ 泰山の観光整備

２．泰山の構成資産と評価点数化

本章では中国政府による作成した泰山の世界遺産登録推薦書『世界遺産:中国泰山』(1986)[7]をもとに、泰山の構成資産の名称、位置と種類を整理する(表１)。さらに、世界遺産の諮問機関である ICOMOS の評価書(1986)[8]、IUCN の評価書(1987)[9]、世界遺産委員会（WHC）のホームページにある泰山の紹介文[10]を加え、①登録推薦書－資産目録の章、②登録推薦書－推薦理由の章、③諮問機関の評価、④世界遺産委員会(WHC)の評価という４つの項目を立て、それぞれ言及した構成資産に１点を付け、構成資産の評価点数を計算する(表 1)。最大の 4 点を得た構成資産を泰山の代表的な構成資産とみなす。

その結果、確認できた構成資産は 87 件であり、その位置により、大きく 9 つのエリアに分けられる(図 3)。泰山の構成資産は泰安市街地から泰山山頂までの南麓エリア―中部エリア―岱頂エリアに集中していることが示された。構成資産の種類について、文化的資産(46 件)と自然的資産(41 件)に分けられ、さらに文化的資産に古建築・石碑石刻・遺跡・古跡・記念物、自然的資産に自然資源、古木、自然奇観の具体的な 8 種類がみられ、構成資産の種類が多様である。

本研究で扱う泰山の代表的な構成資産は 10 件であり、南麓、中部、岱頂エリアのほか、泰山の北西の霊岩寺エリアと泰山南麓と 35km 離れたその他(大汶口遺跡)にも分布している。泰山の中心区域と離れているエリアにも泰山の代表的な構成資産があることが示された(表 2)。

表 1 世界遺産「泰山」の構成資産リスト(一例)

ID	日本語名称	エリア	資産種類	資産の言及				
				①資産目録	②推薦理由	③諮問機関の評価	④WHCの評価	評価点数
42	天貺殿	南麓エリア	記念物	1	1	1	1	4

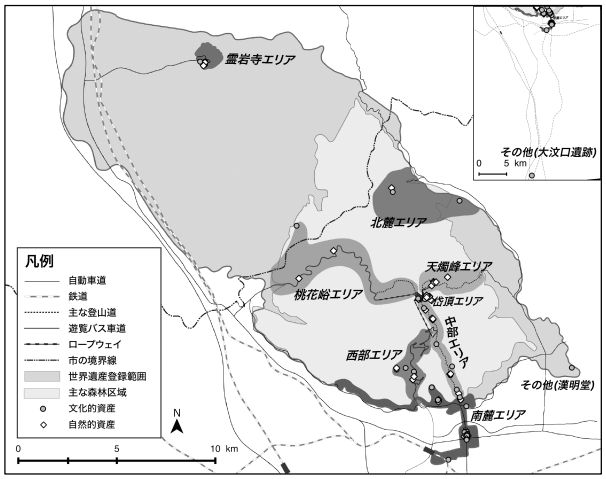

図３ 泰山の構成資産の位置とエリア区分

表２ 泰山の代表的な構成資産

ID	構成資産	エリア	種類	評価点数
21	漢柏	南麓	古木	4
42	天貺殿	南麓	記念物	4
43	泰山神啓蹕回鑾図	南麓	記念物	4
46	十八盤	中部	古建築	4
47	岱廟	南麓	古建築	4
48	碧霞祠	岱頂	古建築	4
49	霊岩寺	霊岩寺	古建築	4
80	経石峪摩崖刻経	中部	石碑石刻	4
81	紀泰山銘碑	岱頂	石碑石刻	4
83	大汶口遺跡	その他	遺跡	4

世界遺産学研究 No. 3（2016）
ISSN 2189-4728

３．構成資産の現地での情報提供

本章では泰山の構成資産の現地での情報提供の現状を確認し、各構成資産の情報提供の度合を点数化して情報提供の偏りを把握する。

現地調査の結果をもとに、泰山にある主な情報媒体を観光標識、紙媒体、ガイドに大別し、さらに観光標識に指導標・案内板・解説板・標示碑、紙媒体にパンフレット・地図・チケットに分類した。観光標識は泰山全域に分布しており、設置数も多くて観光者に目に触れることが多いと考えられる。紙媒体における情報提供の形式が豊富で、ガイドによる解説も構成資産への理解に非常に役が立つような内容であるが、紙媒体の入手場所は限られており、ガイドの解説に触れる観光者もごく一部である。情報媒体の設置数が最も多い区域は南麓エリアであり、次に岱頂エリア、中部エリアという順になることが示された。

個々の構成資産の情報提供の度合を把握するために、各情報媒体から表３の 14 項目を抽出し、構成資産の情報提供の有無を確認し、情報提供のある項目に１とカウントし、足し算で点数化した。その結果、構成資産の最大得点が 14 点、最低得点は０点で、全体の平均得点は 4.1 点である。エリアごとの平均点数を比較すると、最も高いエリアは南部の岱頂、中部、西部エリア、最も低いエリアは北部の霊岩寺エリアと北麓エリアである（表 4）。構成資産の種類では、文化的資産、特に古建築に関する情報提供が多く、自然的資産の自然奇観と古木の情報提供が少ないことも示された。

次に、情報提供の点数の上位 9 位の構成資産（15 件）を抽出した（表 5）。これらの構成資産も岱頂、中部、西部、南麓エリアに集中している。これを２章で確認した 10 件の代表的な構成資産と比較すると、代表的な構成資産の半分以上（6 件）が情報提供の上位資産に入ったが、泰山神啓蹕回鑾図・大汶口遺跡という情報提供点数が低い構成資産もあることがみられた。

表３ 構成資産の情報提供の点数化（一例）

ID	構成資産	観光標識				紙媒体									ガイド	合計点数
						パンフレット			地図			チケット				
						誘導	解説		誘導	解説		誘導	解説			
		指導標	案内板	解説板	標示碑		文字	写真		文字	写真		文字	写真		
1	醉心石	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3

表４ エリアごとの情報提供の平均点数

エリア	資産数	平均点数
中部エリア	18	4.8
岱頂エリア	17	4.8
西部エリア	7	4.7
桃花峪エリア	3	4.3
天燭峰エリア	6	4.2
南麓エリア	25	3.8
その他	2	3.5
霊岩寺エリア	6	2.2
北麓エリア	3	2.0

表５ 情報提供の上位９位の構成資産

順位	ID	構成資産	情報提供の点数	エリア	種類
1	47	岱廟	14	南麓エリア	古建築
2	60	王母池	12	南麓エリア	古建築
2	61	普照寺	12	南麓エリア	古建築
4	48	碧霞祠	11	岱頂エリア	古建築
4	59	玉皇廟	11	岱頂エリア	古建築
6	81	紀泰山銘碑	10	岱頂エリア	石碑石刻
7	80	経石峪摩崖刻経	9	中部エリア	石碑石刻
7	2	黒龍潭	9	西部エリア	自然資源
9	31	望人松	8	中部エリア	古木
9	46	十八盤	8	中部エリア	古建築
9	3	扇子崖	8	西部エリア	自然資源
9	67	無極廟	8	西部エリア	古建築
9	38	彩石溪	8	桃花峪エリア	自然資源
9	42	天貺殿	8	南麓エリア	記念物
9	11	旭日東昇	8	岱頂エリア	自然奇観
合計		15			

４．旅行記にみる観光者の構成資産に対する認識

本章では、観光者の立場から、泰山の構成資産に対する認識の現況、特にその認識の偏りを確認する。具体的な方法として、中国の最も利用率の高い旅行記ウェブサイト「Mafengwo.cn」[注2]の泰山のホームページに投稿された旅行記を用い、単語の頻度調査を行う。観光者の印象の強い構成資産を把握するために、集計方法は、旅行記の本文に対象単語が１回記載された時、出現頻度に１とカウントする。

（１）旅行記データの概要

分析対象とする旅行記は2015年6月1日から2016年5月31日までの438件の記事である。月ごとの投稿数をみると、最大投稿数は８月で、最低投稿数は12月で、月平均36.5件である。文字数について、平均文字数は約 1,867 文字であり、3,000 字以下の旅行記（365 件）は全体の 8 割以上を占めている。一つの記事に構成資産が多く記載されると、全体の単語頻度に偏りが生じることから、文字数が 9,000 字以上の記事は分析対象から外した。

（２）旅行記における構成資産の出現頻度

２章で確認した87件の構成資産の出現頻度に大きな差が見られ、構成資産への認識に偏りがあることがわかった。観光者の認識は特に上位５位の構成資産に集中している（図 4）。

世界遺産学研究 No. 3（2016）
ISSN 2189-4728

エリアごとの構成資産の出現頻度の合計をみると、多く記載されているエリアは岱頂、中部、南麓エリアである（図5）。しかし、これらのエリアの出現頻度に上位5位の構成資産の部分が大きいことがみられた（図5）。また、同一エリア内でも、構成資産に対する認識が偏っていることがわかった（図6・図7）。一方、北麓、霊岩寺、西部エリアとその他のエリアにある構成資産はあまり認識されていなかったこともわかった。構成資産の種類をみると、全体的に自然的資産の出現頻度は文化的資産に比べてやや高いことがわかった。最も多く記載されたのが古建築と自然資源の構成資産であり、自然的資産の古木、文化的資産の石碑石刻及び記念物に対する認識は低い。

次に、出現頻度の上位10位の構成資産を抽出した（表6）。上位10位の構成資産は岱頂エリアに集中しており、9つのエリアの中の4つのみに分布している。一方、全く記載されていない構成資産は13件であり、主に霊岩寺エリアに集中している。

（3）代表的な構成資産の出現頻度

2章で確認した10件の代表的な構成資産の出現頻度をみると、そのうち観光者に認識された上位10位の構成資産に入ったのが3件のみである。また、霊岩寺と大汶口遺跡の出現頻度は非常に少ない。観光者に強く認識された構成資産と代表的な構成資産がずれており、認識が極端に低い代表的な構成資産もあることがわかった。一方、「世界遺産」「複合遺産」などの世界遺産条約に関する単語の出現頻度がどれも10回以下であり、観光者の世界遺産の概念に対する認識も非常に低いことがわかった。

5. 総合考察

本章では、各章の結果を踏まえ、観光者の構成資産に対する認識の偏りと構成資産の観光整備及び情報提供との関係を考察する。

（1）エリアごとの観光現状と構成資産に対する認識

3章で確認したエリアごとの情報提供の平均点数（図8）と4章で確認したエリアごとの出現頻度の平均頻度注3（図9）を比較すると、観光者に比較的に強く認識されているエリアは山頂である岱頂エリアと南の駅に近い南麓、中部エリア、また登山ルートである天燭峰、桃花峪エリアであり、構成資産へのアクセスと登山ルートの影響が大きいといえる。構成資産に関する情報提供もアクセスが良いエリアに偏っており、中心部と離れているエリアに関する情報提供は不足で、さらに認識の偏りを強くした。一方、情報提供の多い西部エリアはあまり認識されておらず、情報提供の質が低い可能性があると考えられる。

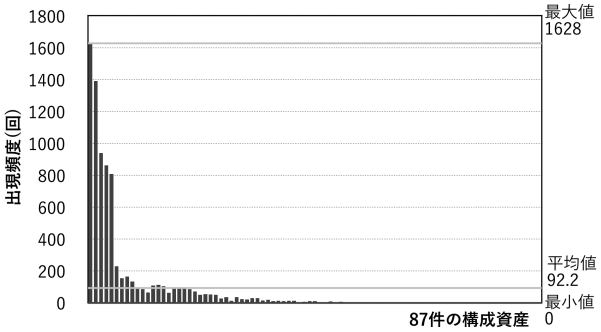

図4 旅行記における87件の構成資産の出現頻度

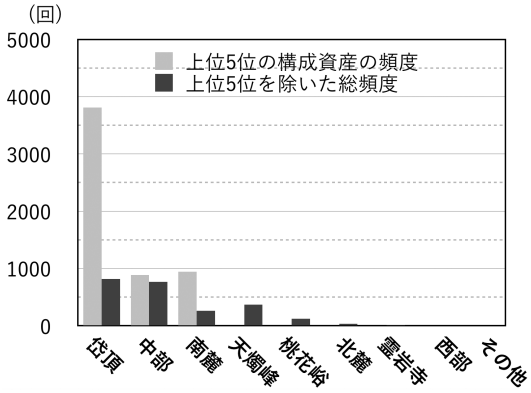

図5 エリアごとの構成資産の出現頻度の合計

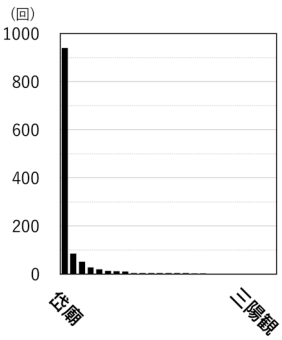

図6 南麓エリアの出現頻度

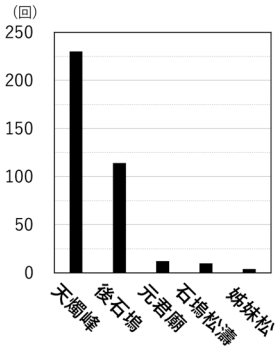

図7 天燭峰エリアの出現頻度

表6 出現頻度の上位10位の構成資産

順位	ID	構成資産	評価点数	エリア	種類	出現頻度
1	11	旭日東昇	1	岱頂エリア	自然奇観	1628
2	56	南天門	2	岱頂エリア	古建築	1391
3	47	岱廟	4	南麓エリア	古建築	940
4	46	十八盤	4	中部エリア	古建築	862
5	59	玉皇廟	1	岱頂エリア	古建築	809
6	4	天燭峰	1	天燭峰エリア	自然資源	230
7	12	雲海玉盤	2	岱頂エリア	自然奇観	165
8	48	碧霞祠	4	岱頂エリア	古建築	155
9	13	晩霞夕照	1	岱頂エリア	自然奇観	133
10	41	後石塢	2	天燭峰エリア	自然資源	114

世界遺産学研究 No. 3（2016）
ISSN 2189-4728

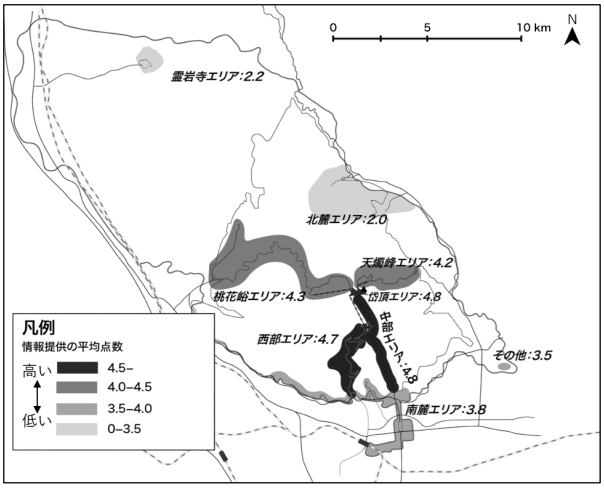

図８ エリアごとの情報提供の平均点数

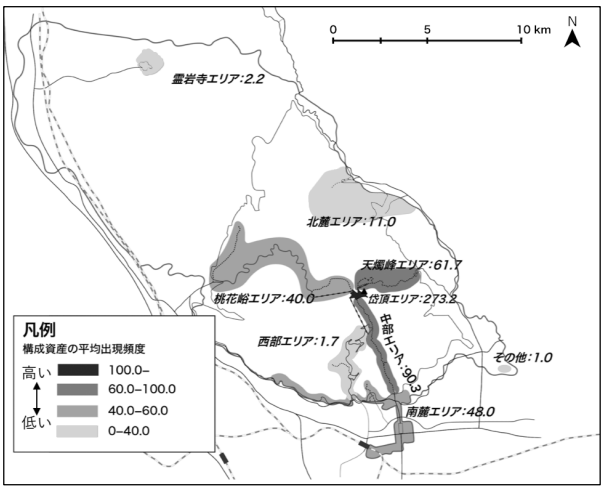

図９ エリアごとの構成資産の平均頻度

表７ 価値・情報・認識の上位にある構成資産

ID	各章の上位にある構成資産	価値	情報	認識
47	岱廟	1	1	3
48	碧霞祠	1	4	8
46	十八盤	1	9	4
80	経石峪摩崖刻経	1	7	
81	紀泰山銘碑	1	6	
42	天貺殿	1	9	
59	玉皇廟		4	5
11	旭日東昇		9	1
21	漢柏	1		
43	泰山神啓蹕回鑾図	1		
49	霊岩寺	1		
83	大汶口遺跡	1		
60	王母池		2	
61	普照寺		2	
2	黒龍潭		7	
31	望人松		9	
38	彩石溪		9	
3	扇子崖		9	
67	無極廟		9	
56	南天門			2
4	天燭峰			6
12	雲海玉盤			7
13	晩霞夕照			9
41	後石塢			10

注1：塗りつぶしは３つの項目に共通している構成資産
注2：各数字は順位を示し、空白は該当項目に入っていないことを指す

（２）種類ごとの情報提供と構成資産に対する認識

３章と４章で確認した種類ごとの構成資産の情報提供と出現頻度の順位を比較した結果、種類ごとの認識の度合と情報提供の度合の順序が同様な傾向がある。ただし、自然奇観は情報提供によらず、観光者に強く認識されていることがみられた。自然奇観という直観的な自然美は鑑賞・認識されやすいと考えられる。

（３）価値・情報・認識の上位の構成資産に関する考察

本項は、代表的な構成資産と情報提供、認識の上位の構成資産を比較し、その相違を考察する。考察方法は、２章・３章・４章で抽出した価値・情報・認識の上位の構成資産を取り上げ、3 つの項目にある構成資産、2 つの項目にある構成資産、1 つの項目のみにある構成資産を確認し、その要因を考察する。

（ｉ）３つの項目に入った構成資産

3つの項目に共通している構成資産は岱廟（ID47）、十八盤（ID46）、碧霞祠（ID48）の 3 件のみである（表７で淡い灰色に塗りつぶした行）。この 3 件の構成資産は泰山の代表的な構成資産で、資産に関する情報提供も充実であり、観光者にも強く認識されていることがわかった。この状態は理想的であるが、これらの構成資産は３件のみであり、ごく限られている現状である。しかも、この 3 件の構成資産はともに古代皇帝の封禅に関わる古建築であり、泰山の多様な価値の一つのみに集中していることがわかった。

（ii）２つの項目に入った構成資産

まず、代表的な構成資産と認識の上位資産に入ったが、情報提供の上位資産に入っていない構成資産は見当たらない。代表的な構成資産を理解させるために、情報提供の役割が大きいことが示された。

代表的な構成資産と情報提供の上位の構成資産に入ったが、認識の上位の構成資産に入っていない構成資産は 3 件で、情報提供の質が低い可能性が示唆された（表 7）。

代表的な構成資産ではないが、情報提供と認識の上位資産の両方に入った構成資産は 2 件で、これらの構成資産はともに山頂にあり、泰山の観光のシン

世界遺産学研究 No. 3 (2016)
ISSN 2189-4728

ボルとなりうる資産であり、注目されやすいためであると考えられる（表 7）。

（iii） １つの項目のみに入った構成資産

代表的な構成資産のみに入った構成資産は 4 件である(表 7)。霊岩寺(ID49)と大汶口遺跡(ID83)は泰山の中心部と遠く離れており、交通アクセスが悪いのが主な原因であると考えられる。しかし、ほかの 2 件はアクセスの良い南麓エリアに位置し、情報提供が不足であることがみられ、認識が低い原因であると考えられる。

情報提供の上位のみに入った構成資産は 7 件である(表 7)。情報はよく提供されているが、観光者にその情報が適切に伝わっていなかった可能性が示唆された。情報提供を充実する際に、観光者の理解の度合も考慮し、情報の質や新たな情報媒体の採用も重要であると考えられる。

構成資産の評価点数と情報提供によらず、観光者に強く認識された構成資産は 5 件である(表 7)。山頂にある泰山のシンボルとされている「南天門」と自然気象のほか、天燭峰エリアにおける 2 件の自然資源の構成資産もみられた。

６．結論と展望

本研究を通して、観光者の泰山の各構成資産に対する認識には大きな偏りがみられ、観光者の認識は特に上位５位の構成資産に偏重していたことがわかった。泰山全体を観光エリアに分けて、観光の中心部のエリアにある構成資産が認識されやすく、中心部と離れたエリアにある構成資産は認識されにくい傾向が示された。さらに、同一エリア内でも構成資産への認識が偏っていることが明らかになった。それらの偏りの要因として、南に位置する駅から構成資産へのアクセスの便利性が高いことと情報提供が多いことが原因であると考えられる。一方、観光者によく認識されやすい構成資産と代表的な構成資産は必ずしも一致しておらず、世界遺産としての泰山に対する認識がまだ不十分であるといえる。また、世界遺産の価値と情報提供によらず、観光者に強く認識されている構成資産も存在しており、それらの構成資産の魅力を再確認し、適切な保護と情報提供を行う必要性も明確になった。

観光者に世界遺産の構成資産を偏りなく認識させるための観光開発には、アクセスの改善のほか、構成資産の全体への理解を促すような情報提供と、観光者の認識の度合に基づく観光開発が求められる。観光者の構成資産に対する認識の度合を常に確認し、観光者に認識されにくい構成資産に対する適切な観光開発の促進と、観光者に認識されやすい構成資産と認識の低い構成資産を組み合わせる観光開発が求められる。

今後、観光者の構成資産に対する具体的な記載内容に目を向けて、構成資産の価値伝達の度合を確認することが課題となる。

注：

注 1） 封禅は中国の帝王が泰山で祭祀活動を行うことを指す。

注 2） 2015 年 8 月勁旅網の統計によるランキングである。
http://www.ctcnn.com/html/2015-08-26/15750666.html
(2015 年 8 月 26 日参照)

注 3） エリアごとの出現頻度の平均頻度＝エリアの出現頻度の合計/エリアの構成資産数。

引用文献：

1)文部科学省：世界遺産条約(仮訳)、
1972 http://www.mext.go.jp/unesco/009/003.html

2)松浦晃一郎：世界遺産　ユネスコ事務局長は訴える、講談社、
ｐ243、2008

3)尹燕：基于旅游环境承载力的可持续发展研究、硕士学位论文
湖南师范大学、pp.46-48、2009

4)王雷亭：泰山旅游发展研究、山东人民出版社、pp57-59、2013

5)伊藤弘：ブログにみる松島の風景と空間の意味の関係、環境情報科学42(2)、ｐ46-52、2013

6)出典：北京晚報：我国权威机构評出中華十大名山（2003年1月17日）http://news.sohu.com/57/46/news205814657.shtml

7) 泰安市地方史志编纂委員会：泰山自然遗产申报文本（摘录）、泰安市志· 泰山篇(1998-2002)、2002

8)ICOMOS： Advisory Body Evaluation、1987
http://whc.unesco.org/document/153473

9)IUCN：Advisory Body Evaluation、1987
http://whc.unesco.org/document/153475

10) World Heritage Centre：Mount.Taishan
http://whc.unesco.org/en/list/437/ (2017年1月16日)

11) World Heritage Centre：WHC Nomination Documentation no.437、1987

12) 泰安市地方史志编纂委員会：泰安市志· 泰山篇(1998-2002)、2009

13)日本観光協会：観光計画の手法(観光基本資料シリーズ〈27〉、pp.346-349、1976